



説教要旨 「誰に祈っていますか」

ルカによる福音書18章9～14節

イエス様は一つのたとえを語られました。「二人の人が祈るために神殿に上った。一人はファリサイ派の人で、もう一人は徴税人だった」(10節)。ファリサイ派は、律法を厳格に守ることを大切にしていた人々です。対して徴税人はその正反対、神の民であるユダヤ人でありながら、異邦人であるローマに納める税金を徴収し、それによって私腹を肥している裏切り者であり、罪人の代表です。この対照的な二人がまた見事に対照的な祈りを献げています。ファリサイ派の人の「ほかの人たちのように奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないこと」(11節)という祈りは、自分が正しい者であるという自負に満ちています。他方徴税人は一言、「遠くに立って、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら」(13節)、つまり自分が神様にとうてい顔向けできない罪人であることを嘆き悲しみつつ、「神様、罪人のわたしを憐れんでください」(13節)。と祈ったのです。

ファリサイ派の人の祈りは神様に向けられているかに見えますが、彼の目は周囲の人々に向けられています。「奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者」たちと自分とを見比べて、自分がそれらの者たちより“正しい者”であることに安心しているのです。彼の目は、他の人と自分自身にばかり向けられていて、神様の方に向けられていないのです。それに対して徴税人の祈りは、神様のみが目に向けられています。彼の目には、周囲の人間は全く入っておらず、ただひたすら神様のみを見つめ、神様による罪の赦しを願い求めて祈っているのです。

神様の前に立つこと。それは言い換えれば、神様の裁きの場に立つということです。神様に裁かれる者として、畏れをもってみ前に立つならば、私たちはこの徴税人のように自分を低くするしかありません。なぜなら、私たちは神様の前に堂々と立つことなどできず、目を天に上げることもできず、遠くから、胸を打ちながら、「神様、罪人のわたしを憐れんでください」と祈り、神様の憐れみにすぎることしかできない者だからです。